第1章 被害者の手記

交通事故に遭って感じたこと

２６歳　女性

私は、交通事故を起こさないようにしようと心掛けていましたが、まさか、自分が事故に遭うとは全く想像もしていませんでした。

私は、青信号の横断歩道を横断中に信号無視の車に跳ねられました。

気がついた時には病院で、両親もいて、即入院ということでした。

私はまず、「自分の体はどうなったのか。」「救急車の中で一瞬足が痛かったけど足はどうなったのか。」「女性だし顔に傷はないか。」と、とても心配になりました。両親への第一声が、「顔は傷ついていない？」と聞いたのをよく覚えています。

足以外に大怪我がなかったことが、本当に不幸中の幸いだったと思います。

生身の人間が車に数十メートル飛ばされていれば命を落としていてもおかしくないことなので、それは運がよかったというか助けられたんだなと思いますが、今考えても恐ろしさが込み上げてきます。

冷静になると、「仕事は？」「足は元通りに戻るの？」など、不安なことや心配なことばかり考えていました。

信号無視は決して許されることではないけれど、夜だったし、わざとでもないし、私の命も助かったし、十分反省しているだろうし、そして、「加害者もこれから大変なんだろうな」と、その時は少し同情の念もありました。

しかし、加害者は、まず自動車保険に未加入で、こちらへの保障の手続きを全くしようとせず、加害者本人、その家族からの心ない言動で本当に傷つき、体の怪我に加え、心にも大怪我を負った気持ちで一杯になりました。

入院中も、私や家族が色々な諸手続きに追われ、私は仕事帰りということで会社が労災申請をして下さり、入院費やその他のことも全てこちらがしました。これではどちらが被害者なのか分かりません。

事故と一言でいっても、その被害者が背負うものは本当にたくさんあり、いつまでも忘れられない出来事になるんだと身を持って感じました。

私の場合は特に、加害者の対応の悪さが一番の要因だったと思います。

「１回だけなら。」、よくそう言って人は色々なルールをやぶると思います。

私もそういう気持ちからルールをやぶったことがあります。

でも、自分の心ない行動によって嫌な思いや被害を受けるのは別の第三者であることが多いということを考えなくてはいけないと思います。

何のためにルールがあり、守る必要があるのか考えれば、そういう行動には移さないと思います。

飲酒運転も、「自分は酔ってはいない。」、「代行を頼むのは面倒だ。」、そう考えている時点で、もうルールをやぶるには十分過ぎる位の予兆になると思います。

そんな身勝手な行動で、大切な命やキラキラの笑顔を奪わないで欲しいと思っています。

私は、今回事故に遭って、誰でも被害者、加害者になる可能性があるんだと実感しました。

どちらにもならないためには、自分本位ではなく、相手の立場に立った行動が大切だと思います。

「自分が急いでいるから。」、「自分が先だから。」など、自分が自分がと自己中心的な行動ばかりでは事故は減らないと思います。

今回のことでは、本当につらく、体もまだ元には戻っていないし、本気で人が憎いとも思いました。

その反面、家族、友人、会社の方々、事故の目撃者に助けられ、日常生活に戻ることで感謝の気持ちで一杯になり、その人達のためにも落ち込んでばかりいずに前に進もうと勇気が出ました。

でも私は、加害者を一生許すことはありません。

正直、法律が私の今までの悲しみや辛さを加害者に対して十分な刑で裁いてくれたとは思いません。

結局私を助けてくれたのは、「人」だと思います。

だから、一人一人が少し意識するだけで変わってくると思います。

ドライバーも歩行者もみんな生きています。

大切に思う人、思われる人がいます。

どうかその人達のことを思い浮かべて、その人達の笑顔を守るためにも何事をするにも一呼吸おいて考える余裕を持って欲しいです。

そして、自分を大切にして欲しいと思います。